

「私が福山市を選んだ理由」 福山市立神辺小学校 古東秀一

私は「子どもの思いに寄り添い信頼される教員」になりたいと考えています。

私自身これまで不登校支援のボランティアや小学校の支援員、小学校常勤講師の活動を通して、様々な思いを抱えている子ども達と出会ってきました。学校に行きたい気持ちはあるけれど「なぜか身体が動かない」と悩んでいる子、日々の授業の中で「分からない」と感じている子など、多くの子ども達が様々な思いをもって日々の生活を過ごしています。広島県が平成29年度に実施した「子どもの生活に関する実態調査」においても、生活が困難な家庭ほど「授業の内容が分からない」と感じている子どもの割合が高いと示されています。

広島県の教育施策の中で『県民一人一人が、年齢、性別、国籍、経済事情、障害の有無等にかかわらず、自分のよさを認識し、互いの人格や価値観を尊重しつつ、自身の「能力」と「可能性」を最大化し、自身が抱く夢や希望に向かって挑戦することができるようにしていくことが何よりも重要』と記載されており、一人一人の価値や思いを大切に育てていくということを何よりも大事にしていると感じました。

そうした県の取組の具体的なものとして、不登校支援の「SCHOOL “S”」が挙げられます。また、広島県の中でも、子どもたち一人一人に寄り添う教育を最も実践しているのが福山市です。日本初のイエナプラン公立学校である常石ともに学園の設置を知った時は、私自身驚きとわくわくする気持ちでいっぱいになりました。

他にも福山市の中学校では校内フリースクールの取組も行なっています。広島県の平川教育長と福山市の三好教育長の校内フリースクールに関する対談において、三好教育長が言っていた言葉に「不登校対策というよりも一人一人の違いを認める。」「人は違って当たり前。その感覚ですね。」「大切なのは一人一人の気づきや思いであり、それが人によって違うからこそ、その価値が認められる。」というものがありました。また、同対談の中で、平川教育長が『最終的に目指しているのは、一人一人の子どもが主体的に学び、その能力を最大限伸ばしていくような状態。そのための一番の課題は「教員の意識」をどう変えていくか。子どもに対して「教えなければならぬ」という意識を変える』と言っていました。私自身、そうした言葉に強く共感を抱き、そして、特に実践されている福山市で働きたいと思うようになりました。

もちろん、他県においても「一人一人の子どもたちに寄り添う教育」を実践していると思います。しかし、広島県や福山市のように具体的な取組や実践につながっているところは少ないように見えます。私も大学院において「ユニバーサルデザイン」や「インクルーシブ教育」に関心をもって学修を進めてきました。そうした学生時代に学んだ知見も活かしつつ、福山市の教員の一員として、福山市の教育に触れ、共に働く同僚の先生方にご指導頂き、そこで育っていく子どもの姿を見て学び、教員として成長していきたいと考えています。